

2022年7月17日 (第208号)
発行所 カトリック高松教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

カトリック 高松教区報

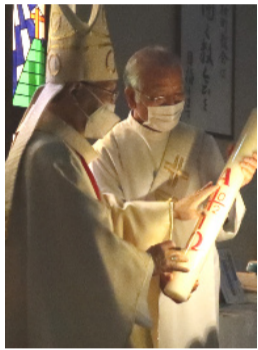
マザー・テレサの言葉
私たちがやっていることは大海の一滴にすぎないことは、私たちが身感じています。しかし、大海はその一滴は少なくないのです。

次のステップへ 「福音マーケット」の奉仕者

諏訪榮治郎司教
ワクチンの接種や感染による免疫獲得によるのでしょうか、感染者が減少している傾向にあります(6月現在)。

これからは夏に入り人の流れが拡大すると再び感染増加に転じるのではないかと危惧を抱きつつも、感染対応を整えながら各地区の教会は次第に通常の典礼に戻ろうとしています。そんな中、コロナ禍で途絶えていた2018年以降の「福音マーケット」の次のステップを思い起こさざるを得ないのです。

「主の聖体」主日のルカ福音書9章は、「福音マーケット」について語っておられるのではないかと思われ筆をとりました。イエスと弟子たちの後を追いかけておおうと群衆(あたたかも飼い主のいない羊のように途方に暮れる群衆)を見たイエスの心は張り裂けるように途方に暮れる群衆を見たイエスの心は張り裂けるように途方に暮れる群衆を見たイエスの心は張り裂けるように途方に暮れる群衆を見た...



桜町教会 復活徹夜祭にて

祝 司祭叙階金祝



ルイス・グティエレス師

聖ドミニコ修道会司祭。スペイン・アビラ出身。殉教者聖ペトロ神学院哲学科・神学科卒業。

1972年6月29日、スペイン・マドリッド市殉教者聖ペトロ修道院において司祭叙階。1973年来日。上智大学神学科聴講生。3年来日。上智大学神学助任、道後教会主任、ロザリオ学園道後聖母幼稚園副園長、松山教会主任を歴任。現在は聖ヨセフ修道院にて静養。教会の主任として在任中は「開かれた教会づくり」を目指し、地域社会の中で宣教する教会の姿を探り続けた。



ハビエル・レチョン師

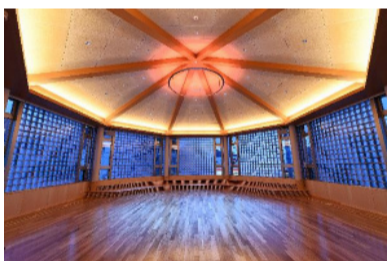
聖ドミニコ修道会司祭。スペイン・ウアリャドリッド出身。殉教者聖ペトロ神学院哲学科・神学科卒業。1972年6月29日、スペイン・マドリッド市殉教者聖ペトロ修道院において司祭叙階。1973年来日。上智大学大学院卒業。UCA News 特派員。

海星幼稚園副園長、西条聖マリア幼稚園園長、西条教会主任、ロザリオ学園天使幼稚園園長、郡中教会主任、ロザリオ学園八幡浜聖母幼稚園園長、ロザリオ学園宇和島聖母幼稚園園長、ロザリオ学園理事長、ロザリオ学園海の星幼稚園園長、愛媛地区中予ブロック協力司祭を歴任、現在に至る。ドミニコ会の正義と平和の担当者であり、いつでも平和のために努力した。

道後 新園舎完成 子どもたちに良いものを

道後聖母幼稚園園長 松本綾美

私は、2021年4月、園舎建替えのプロジェクトを前任園長より引継ぎ、大きな不安を抱えて道後聖母幼稚園に転動してきました。着任後、カトリック道後教会の津村議長様、竹葉様に「なんでも言ってください。子どもたちのために必要なことは、なんでも協力しますよ。」と笑顔でお話いただき、私の大きな不安



クリスタルホール内部

は吹き消され、すぐに大きな希望の光が灯り、あつという間に1年が経ちました。この、原稿を書く機会をいただき、竹葉様からお借りした「カトリック道後教会 献堂50周年記念誌 発行2009年6月28日」には、教会の歩みとして、厳しいキリシタン時代の宣教の様子。歴史を重ね、1956年4月2日に平屋建て木造園舎が落成し、「聖母幼稚園」と名付けられ園児85名で開園、その後、司祭館が1957年2月に落成、ゴシック風の現在の教会が1959年6月28日に完成。2回目に建設された園舎は、一部が3階建てコンクリート造で大きなマリア像が平和のシンボルとして設置され、子どもたちを優しく見守っていた。と記されていました。

3回目となる新園舎は、「子どもたちに良いものを」と、整えられた環境の中で子どもたちが生き生きと生活ができることを願い、積み重ねられた歴史とともに、ドミニコ修道会の神父様方、カトリック道後教会の信徒の皆様、建設に関わる全ての方、園児、保護者、地域の皆様、ロザリオ学園の教職員の心が一つとなり2022年3月18日に完



園庭のシンボルツリー (夜間撮影)

はばたき

知人に紹介された小冊子「イフサイエンス89号」に上野照剛東京大学名誉教授の海外印象記その15がありました。それは上野先生のスペインのバルバオというバスク地方で一番大きな町の訪問記でした。このバルバオの東には日本にゆかりの深いザビエルが生まれたサンセバスチャンや、ザビエルを信仰に導いたロヨラの生誕地アスぺイティアがあります。この2人がパリ大学で出会い、イエス会が創立され、その15年後、ザビエルによって日本にカトリック教が伝えられました。彼らの生誕地バスク地方のゲルニカは1939年、スペイン内戦中に住民が無差別空襲により虐殺され、ピカソのゲルニカが平和の象徴として描かれたことは有名です。そしてこのバスク地方から多くの司祭が召命を受けました。

教区シノドス報告書 カトリック高松司教区



6月初旬、日本司教団に提出された「高松教区でのシノドスの歩みの報告書」を掲載します。これは、教区小教区の次のステップへの一里塚となるものです。

◇◇前書き◇◇

カトリック高松司教区

本司教区は所属信徒数が極めて少ない司教区の一つであり、教区所在地も日本国内でも人口密度が低く、公共交通機関等が未整備な地域である。この地域は仏教の伝統が非常に強い土地柄であり、域内全域が88仏教寺院からなる広く知られた仏教巡礼地である。25小教区からなり総信徒数4332名(2021年度)で、カトリック信者の割合は地域総人口384万5534人の0.11%と、日本全体のカトリック信者の割合0.34%に比べても3分の1以下と低く、日本国内においても最も信徒数の少ない教区である。フルタイムで司牧にあたっている実働司祭数は14名で、そのうち70歳以上の司祭が3名である。教区規模が小さい利点もあり、司教、司祭、信徒の心理的距離が近く、互いに補完的かつ協力的で、司教のリーダーシップがとり易い。

高松司教区におけるシノドスへの歩み

今回のシノドスへの歩みにおいても、司教の強いリーダーシップがあったためコロナ流行という困難な状況下にも関わらず、各小教区において一応のまとめが書けることまで信徒の話し合いを続けることができた。とはいえ、コロナウイルス流行による行政からの制限(移動や集会など教会活動に対し)という大きな不運且つ困難を別にしても、各小教区がまじめに取り組んでゆくにはスケジューリングにも無理があり、且つ、内容的にも私たちの日常的な関心とは少しずれており、しかも分量が多く、分かち合いの焦点が曖昧にならざるを得なかった。

6月初旬、日本司教団に提出された「高松教区でのシノドスの歩みの報告書」を掲載します。これは、教区小教区の次のステップへの一里塚となるものです。

理由には高齢化や感染症流行など自然要因もあるが、教会内対立や差別的扱い、外国語など人為的要因もある。「共通した目標が持てないから来続けることが困難」「差別的という指摘の中には、受洗の有無といったメンバーシップに関するものだけでなく無職・貧困といった社会的な問題、我が儘や話しがくどいなど性格的に合わないといった人間関係に起因する問題もある」と、分かち合いでは教会活動での負の面や反省点が強調されがちであったが、一方で、「難しい難しいと思っ

「聴くより話してしまったり、実は聞き流していることも多く、交わりが希薄になっていく」「聴くためには何より時間を作ることが大事だが、日曜にも仕事があり度々時間を割くのは難しい」「人々の声を通して神が私たちに伝えたい声に気付かされる」「見捨てられた人の声も聴きたいが、精神的に病んでい

「自由」に話す」という人が居る一方で「宗教というだけで聞く人が身構える」「婚家では難しい」と、現実社会では信仰者であることが軽い警戒感を持って見られている。一方、「雑談の中で自然な形で表す」「教区報や小教区報を配る」との発言があり、信仰を前面に出さな

「自由」に話す」という人が居る一方で「宗教というだけで聞く人が身構える」「婚家では難しい」と、現実社会では信仰者であることが軽い警戒感を持って見られている。一方、「雑談の中で自然な形で表す」「教区報や小教区報を配る」との発言があり、信仰を前面に出さな

「自由」に話す」という人が居る一方で「宗教というだけで聞く人が身構える」「婚家では難しい」と、現実社会では信仰者であることが軽い警戒感を持って見られている。一方、「雑談の中で自然な形で表す」「教区報や小教区報を配る」との発言があり、信仰を前面に出さな

故使徒ヨハネ松永司神父様 紐差教会での追悼ミサと納骨式

諏訪榮治郎司教も、美しく整え

5月22日(日)、昨年帰られた聖堂には天された松永司神父様の追悼ミサと納骨式が、出身類の方々、幼少時代からの友人の方々やシスター方が待つていました。思えば少年時代に高松市から電車を乗り継ぎ伊万里を経由して約8時間、紐差教会は平戸島のほぼ中央にあたる小高い丘の上にあり、真っ青の空に口マナスク様式の白い塔がそびえ立つ美しい教会でした。歴史の流れの中でいろいろな出来事を内に秘めながら教会近くの丘にカトリック墓地があり、どのお墓も美しく堂々たるもので、全



教会近くの丘にカトリック墓地があり、どのお墓も美しく堂々たるもので、全

することが有効かもしれない。出会う機会を大切に、また、信仰へのコミットを支え続けることが我々の課題である。これは、教区レベルでの分かち合いや文集のようなものにより実現可能であろう。縁なき衆生と思われ人に対しても働きかける方法でもある。

課題4 祝いごと

「ミサと典礼は祈り」「神に向かっている」「深みを感じる時」「成人洗礼なので感激がある」「喜びや新生を示す声が多い」「習慣的に参加」「自分一人の世界で連帯感希薄」「高齢化で奉仕が難しい」といった祝いの中にあっても疎外感を感じる人もあるが、「一つひとつ丁寧」と困難の中でも典礼に関しては工夫する姿が示されている。この課題について、教区民は現状にあまり問題を感ぜていないが、その一つの理由は教会の持つ豊かさ(念祷、黙想、教会音楽、霊的指導など)に十分触れていないため、その豊かさに向けた働きも知らないことによる可能性もあると思われる。典礼に対して、その参加する態度には非常に真剣さがあるが、日本の教会は、豊かになった生活での霊的生活については経験が少ないため豊かな霊的生活への渴望も期待も知らないということではないか。司祭の不足や一般的な価値観(金や時間への)など日本の社会の現状への過適応を反映しているようで、教会のみならず日本社会にとって大きな課題

かもしれない。歩むべき道としては、日本社会一般に共有されている価値観に影響を及ぼすためには、実践性は別にすれば、文筆活動等が想定される。実際的には、今むしろ、典礼に参加する人たちが持っている宝(祈りの喜びや深められる実感など)を育て強くし少しずつ広げて行くことが教区全体として必要であり可能だろう。こういう領域にも、信徒の奉仕職を広げて行く必要性がある。これらは日常生活レベルならびに日本の教会としてのレベルであるが、世界レベルでの課題でもある。高齢化が進む中では、教会の関わりが行き届かない人々と思われる人に対しても文筆活動は一定の効果も期待できる。

後半の課題に対しては発言が少なく、課題が多すぎて手が回らぬということを示している。本教区の信徒にとって、これらの課題に対する体験の薄さを示していると考えられる。以下のまとめを作成するにあたっては作成者が適宜、体験内容に基づいて他の課題での体験や未分化の体験をこちらの課題にも振り分けた分も加えた。

課題5 宣教における共同責任

「頭で分かっているが、行動に結びつかない」「自分には無理」「異教徒だという感覚」と一般論では積極的な声がある一方で、「葬儀は宣教の場」「幼稚園との連携」と具体的な機会

課題6 教会と社会における対話

「チャンスがなく関わってない」「互いに尊重しようとする」と宣教に連なる話は難しい」と否定的な声の一方、「併設幼稚園との連携」「形として見えなるところでの対話(組織としての活動ではない草の根の活動)」と各自の場での体験もある。

には積極的な姿もある。「勉強会を」「殉教者について学びたい」と信徒としての基礎力への渇きも出た。社会での奉仕に関しては「教会とは無関係に地域の人々と一緒に」「外国人をどう巻き込むかについて迷い」と教会としての動きには辛い体験が話された。これらの体験は、あまり高邁な目標を掲げるより身近なところにある機会を大事にするこの大切さを示している。日常生活レベルでの活動が主であるが、教会の関わりが行き届かない人々への働きを考えると、教会外の活動に参加する中でのごく自然な会話を通しての働きかけも有効と思われる。

「基本は一人ひとりの刷新」との気持ちもあり、大多数の教区民にとっては自分の場での継続的な取り組みを目指すのが現実的なことを示している。一方で、こういう日常的なレベルを活性化するためにも、レジオマリエやCLC、MEなどの超教区的な運動体の導入などの工夫の必要性や、AAやDARCなど社会的な取り組みとの関わりによって現代の課題に気付かされ教会

が変わって行けることに気付かされる。教会が変わるためには社会との関わりが必要であり、社会のフィードバックを受けていかねばならない。

課題7 他のキリスト教諸派とともに

「対話は難しい」「家の宗教なので、本気の対話は難しい」、その一方で「共通点があるので協力しやすい」「市民Xmasや世界祈禱日への参加」「互いに相違点でなく共通点を」「カトリックの普遍性をもっと出す」「八幡浜教会では聖堂建設期間中は主日のミサにプロテスタント教会の聖堂を借りた」との発言があった。これらの体験は、あちこちで対話の努力がそれなりになされていること、成果や見出しが見出せなくても諦めてはいないことを示している。霊の声は、忍耐強く続けること、及び、我々の日常的な状況が破壊された時に(戦争や災害など、自らの利益でなく共通益を求めざるを得ない状況)その機会を逃さないことを呼びかけられている。信徒の高齢化や司牧者不足などの社会状況の変化も、実は、教会一致に向かわせる非常事態なのかもしれない。全教派や全国一律でなくても一地方都市レベルでも誰かがスタートを切るようになる。レベルとしては、教区レベルでの指導・承認が必要だろうが、各小教区が近隣の教会・教員と信頼関係を築くことが不可欠な前提となる。エキメニカルな取り組みは、祈

既述のような災害対応のような地域的な課題に取り組む中でも実現するだろう。

課題8 権威と参加

「シノドスに先駆けて小教区の声を聴く」という姿勢に希望を感じる」という言葉がかなりの数あった。今回のシノドスは一つの時を示しているのかもしれない。「互いに相違点でなく共通点を」「司祭の高齢化で信徒による補充が必要」という体験による補完が必要」という体験は、小教区レベルでもこの課題に対する自覚が進んでいること、しかし体験の報告が少ないことは小教区での体験が言葉で表せるほどには深まっていないことを示している。体験数が少ないのではっきりは言えないが、この課題に関するこれまでの教区として取り組みの方向が教区の実情に合ったもので、さらにそれを進める必要性、また、司祭側には「神の民」としての生涯養成の必要性が、聖霊に求められているように感じられる。

課題9 識別することと決断すること

識別や決断という面を考える。例えば小教区評議会のような組織や機関がうまく機能しているかとの反省がある。具体的にそのような評議会について「機能不全が目につく」という発言や、「考えを分かち合いながら責任をもって識別する主体性を一人ひとりが持ち切れない」との指摘もあった。これらは「神の民」としての小教区評議会と司祭との養成が必要である

課題10 シノダリティの中で自己形成すること

「時間を作ること」「皆が神さまの声を聴く」「共通の目的(子育て、介護、趣味など)がある」と集まりやすいなどの発言は、信徒の質問内容への戸惑いを示しているように見える。「シノダリティは業界用語?」にも進む教会と云えばよい」「本当の意味での『神の民』の教会にはなっていない」という声からは、本教区が取り組む協力宣教司牧、すなわち、全ての人が共に考え歩むことが、依然として教区の課題であることを示している。解決したい問題点をあらわにしていると言ふよりも、やはり、本教区の全ての人々がともに歩む途上にあることを改めて気付かされた。同時に霊への対応として、私たちが立ち止まり、日常の動きから一歩退いて「自分と向かい合い、神と向かい合う時間を取る」必要性に気付かせる。「安息日には休み、安息日という時間を聖別された神と向かい合う」、たったそれだけが私たちにむずかしい。「時」を聖別されたということの重大性を、今一度思い起こし、与えられている時を大切に生きよう、聖霊は強く呼びかけておられる。日常レベル及び教区レベル、全世界レベルでの課題である。

訃報

聖ドミニコ修道会

サトルニノ・ゴンザレス・デルガド神父



1926.6.4 スペイン・アピラ県生まれ
1951.9.9 司祭叙階 1952.10 来日、松山教会赴任
1952.10～1953.3 1985.11～1989.11 松山教会
1953.4～1957.3 1996.5～1998.5 今治教会主任
1999.5～2002.2 北条教会主任
2002.2～2006.3 松山教会主任
2006.4～2008.3 2009.4～2010.3 道後教会主任
1957.4～1981.3 学校法人愛光学園 宗教、倫理、英語の教諭
1965.4～1981.3 学校法人愛光学園 理事長
1969.2～1981.3 1995.10～1999.11 聖ドミニコ修道会ロザリオ管区 日本地区長
2022.6.5 松山聖ヨセフ修道院にて帰天(96歳)

聖ドミニコ修道女会

シスター マリアテレサ上田三代子



1935年 宇和島市生まれ
大学生のときに神様と出会い、聖ドミニコ宣教修道女会で61年の修道生活を捧げた。
スペイン語や英語の翻訳をいつも快く引き受け、特に、無原罪の聖母に対するお祈りは欠かしたことがなく、いつも共同体のよいお手本になっていた。
「私は、神の家にいるのが嬉しいのです。」「聖人になりたい。』と言って、ご聖体の前で、平和のためによくお祈りし、最近、ウクライナのことを大変気にかけていた。
天国から私たちのことを見守ってくださいますように。(北条修道院談)
2022.6.1 坂出聖マルチン病院にて帰天(87歳)
2022.6.4 坂出教会にて葬儀ミサ(イスマエル師司式)
Sr 上田の妹、菊池信子氏が所属する宇和島教会で追悼ミサ(申繁時師司式)

地区・ブロックの話題

2022復活祭あれこれ

〜愛媛地区〜

道後教会からは、広報担当の竹葉純子さんがご報告します。道後教会では、1月23日からミサを非公開にしておりましたが、4月10日の枝の主日からミサを公開にしました。聖木曜日と

聖金曜日は、例年と同じく松山教会にて合同で行われました。聖土曜日と復活の主日ミサは、例年通り公開されました。毎年復活祭には復活卵とマドレーヌを配り、サンドイッチなどでお祝いのパーティーを行ってきま

したが、今年はプレゼントもパーティーもありませんでした。なお、3月12日に道後聖母幼稚園の園舎の竣工式が行われまし

た。その後、旧園舎を壊し、その跡地に芝生の園庭が7月に完成の予定です。新居浜教会からは、広報担当の佐渡一邦さんがご報告します。新居浜教会では、聖歌は歌わず

答唱詩編は唱えるだけで、聖週間のミサを実施しました。聖木曜日の洗足式は省略し、復活夜祭では朗読を最低限にし、祝賀会は中止しました。教会立て直しのため、現在の聖堂では5月1日に最後のミサを実施し、5月8日より、修道院でミサを実施します。

今治教会からは、広報担当の新居田大作さんから、別の記事で紹介いたします。

宇和島教会では、堀内伊作議長、典礼担当の後藤敏彦さんから報告します。聖なる三日間は午後7時にミサ、復活徹夜祭には20名が参加、翌10時の復活の主日ミサには30名が参加しました。昨年11月20日に開催

の創立一〇〇周年記念ミサを受け、この日一〇〇周年記念誌を



宇和島徹夜祭

発刊しました。また、担当司祭の申繁時神父が、「新たな一〇〇周年への挑戦の宣言」を行い、日々信仰を大切にしようよう促されました。



南予ブロック 平和祈願折鶴奉納

八幡浜教会では、清水裕子議長が報告します。八幡浜教会では、7年間の交流があったベトナム技能研修生の旧メンバーが帰国し、受難の主日ミサには、久しぶりにニューフェイス3名が参加しました。南予ブロックは聖週間典礼を合同で開催しており、八幡浜では、聖金曜日典礼と復活祭の主日ミサ(13時)のみが行われました。米国から



八幡浜 復活日中ミサ参加者

久しぶりのオルガンも

今治教会 新居田大作 この春も、コロナ禍の様々な制約の中で四旬節に入りました。私達今治教会では、「十字架の道行」を黙想し、聖週間にはヨセフ郷文成神父様と共に、各自でオリブの枝を持って、主イエス・キリストを迎えました。主の晩餐のミサでは「洗足式」で足を洗っていただきながら、「私達も互いに足を洗うことができますように」と心から祈りました。

約70人の信者が参加し、「今夜は本当に良かったね」と、互いに慶び合う徹夜祭でした。5月は「教会の母マリア」の月、今治教会は「聖母に捧げられた教会」です。5月10日には敷地内の若葉幼稚園のかわいい園児達全員を御聖堂に迎え、ヨセフ郷文成神父様から聖水をいただき、マリア様にお花を捧げてくれました。彼らは「戦争が早く終わりますように」「コロナの感染が終わりますように」と、小さな手を合わせていました。



今治 復活祭ミサ

近年今治教会では、信者の高齢化が進む一方で、造船・タオなどの地場産業で技能研修生として働くフィリピンやベトナムからの大勢の若い信者を迎えて共に祈り、交流に努めておりますが、コロナ禍で主日のミサに与る信者の数は減っています。そんな中でも、コロナ禍3回目の復活祭を無事に迎えることができました。久しぶりにオルガンが入り、賛美の歌、感謝の歌の合唱(マスクをして)。この夜のミサには普段の倍くらい



今治 マリア祭

〜東讃ブロック〜 小豆島教会では、松永神父様のご入院により、半年間ミサは土曜日の午後に行われていました。復活徹夜祭もありませんでした。しかし、久しぶりの日曜日、復活の主日の朝に司教様がおいでくださり、ミサを捧げてくださいました。その説教を思い出して、胸が熱くなりました。い出して、胸が熱くなりました。キリストが復活するのを見た者は誰一人いない。しかし、復活した主に出会った人は、確かに会ったと証言した。その喜びは

番町からもミサ配信

今年の復活祭もコロナ禍でのお祝いとなり、感染予防を心がけた典礼となりました。聖週間は例年通り番町教会と合同で、聖木曜日と復活徹夜祭を桜町で、聖金曜日は番町で行いました。桜町ではYouTubeでミサを配信していましたが、聖金曜日には番町教会からの配信にも挑戦、無事に配信することができました。

復活徹夜祭には、桜町と番町から1人ずつ2人の成人洗礼がありました。聖堂の人数制限をしておりましたが、ちょうど聖堂内に収まる参加者が集い、諏訪司教様司式の徹夜祭ミサを、心をあわせてともにお捧げすることができました。

〜西讃ブロック〜

多国籍多彩な顔ぶれ

丸亀教会

6月12日午後、桜町教会聖堂でミャンマー語のミサがあり、香川県と近県(愛媛、岡山、兵庫、広島など)から30人余りの青年が参加しました。司式は今年3月に叙階されたドミニコ会のピーター・ジャ・レ神父です。ジャ・レ神父はミャンマーのご出身ですが、ミャンマー語でのミサは初めてのことでした。

ミャンマーは少数民族が多く言語も少しずつ違っているそう、参加者にはカレン族、ケアン族の方が参加しておら



れ、民族衣装を着た方もいらっしゃいました。ジャ・レ神父は、ミャンマー語ミサを続けたいとおっしゃっていて、次回は神戸か岡山で行うかも知れないそうです。

の行事も無事終わることが出来ました。ミサ中の聖歌は聖歌隊のみで後ろからマイクで歌い、皆さんは心の中の合唱でした。日曜日の復活祭のごミサも、いつも通りの流れで粛々と執り行われ、日本人、フィリピン人、ベトナム人、イタリア人、ペルー人と多彩な顔ぶれで、ほぼ聖堂がいっぱいになるくらい参加者でした。いつもなら、ごミサの後、各自が持ち寄った国際色豊かな家庭料理を食べながら、楽しいパーティーをする

ききました。山神様がギターを手に、皆さんにお別れと感謝の気持ちを込めて「365日の紙飛行機」を歌われ、皆さんは突然の出来事で感激をしながら聞き入りました。その後、日曜学校の子ども達から配られた復活の卵を貰って、皆さん三々五々と家路につきました。

◇教区スケジュール◇

- 7月 1日 (金) 福者ベトロ岐部司祭と187殉教者
- 3日 (日) 年間第14主日
- 10日 (日) 年間第15主日
- 17日 (日) 年間第16主日
- 18日 (月) 海の日
- 24日 (日) 年間第17主日
- 25日 (月) 聖ヤコブ使徒
- 31日 (日) 年間第18主日
- 8月 6日 (土) 主の変容
- 7日 (日) 年間第19主日
- 8日 (月) 聖ドミニコ司祭
- 11日 (木) 山の日
- 12日 (金) 下田武雄師命日
- 14日 (日) 年間第20主日
- 15日 (月) 聖母の被昇天
- 21日 (日) 年間第21主日
- 24日 (水) 聖バルトロメウス使徒
- 27日 (土) 佐々木光雄師命日
- 28日 (日) 年間第22主日

来日した英語教師の信者さんが米国式の復活卵を作成してくださいました。八幡浜から宇和島教会までは高速道路を含み約1時間がかりですので、信者の多くは高齢になり、合同ミサには中々参加できません。いずれの愛媛地区教会も、洗礼やパーティーなどの行

洗礼やパーティーなどの行

洗礼やパーティーなどの行

洗礼やパーティーなどの行

子どもと女性をまもる委員会
 聖職者による性的虐待
 相談窓口
 電話番号：087-831-6659
 相談窓口受付時間
 月曜日から金曜日(祝日除く)
 午前9時～午後5時
 高松教区対応チーム